128

奥木場遺跡（おくこば）

（枕崎市東鹿籠奥木場）

位置と環境

遺跡は国見岳の西側裾野にあたり，花渡川支流の中州川によって開析された丘陵の末端部に位置し，馬の背に張り出した台地に立地している。標高は32～36mであり，西側の水田地からの比高差は約20mである。

調査の経緯

調査は県営特殊農地保全整備事業に伴い，市教育委員会が調査主体となり，県教育委員会の協力を得て，昭和61年度（1988年）に約2,300m²を対象に実施された。

遺構と遺物

調査の結果，本遺跡は旧石器時代，縄文時代早期，縄文時代晩期，古墳時代の複合遺跡であり，そのなかで遺跡の主体は縄文時代早期であることが判明した。

旧石器時代ではナイフ形石器文化期と細石刃文化期に分かれ，前者の石器としてナイフ形石器，台形石器，剥片尖頭器，両面加工尖頭器，角錐状石器などが出土している。

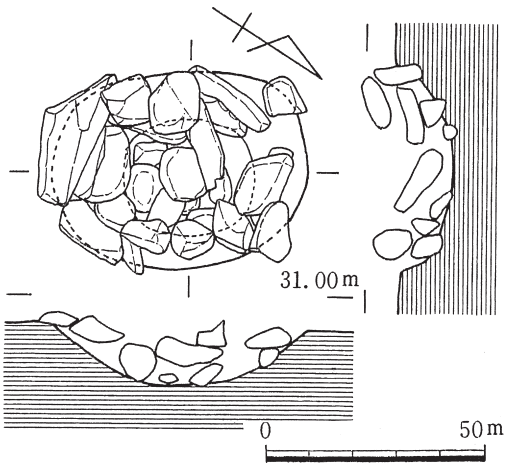
主体となる縄文時代早期では，集石遺構20基のほか落し穴や土坑などの遺構が検出されている。集石は礫の集中度が高く下面に掘り込みをもつものが多く，また，落し穴は底面に10個の小ピットが認められクイの施設が存在したと考えられる。

第１図　奥木場遺跡の位置

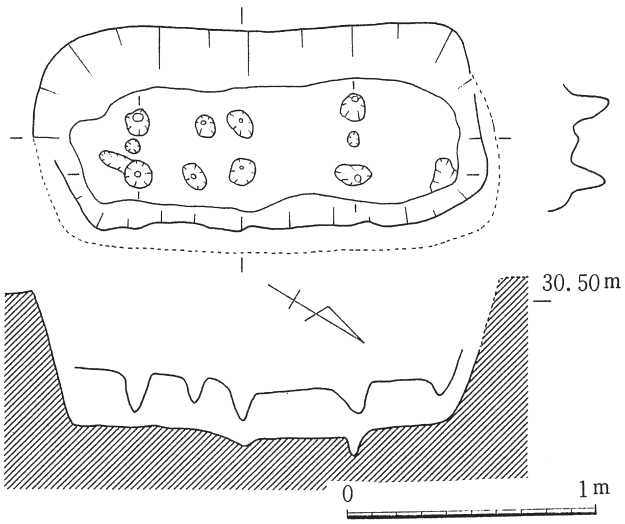
出土した縄文時代早期土器は，押型文土器，貝殻腹縁押圧文を羽状に施文した大型の円筒土器，桑ノ丸式土器，塞ノ神式土器などがあり，このなかで桑ノ丸式土器は完形に復元できるものもあった。

石器には石鏃，石錘，石鋸，石匙，抉入石器，ピエス・エスキーユ，彫器，削器，磨製石斧，磨石，敲石，石皿など多様なものが認められた。石器に使用されている石材は，鉄石英，ホルンフェルス，ギョクズイ，メノウ，頁岩，黒曜石などであるが，黒曜石は少なく，地元産の鉄石英・ギョクズイが多い。

縄文早期土器の一部については，熱ルミネッセンスによる年代判定が実施され，桑ノ丸式土器が8,310年及び8,650年，塞ノ神式土器が7,860年という測定結果が得られている。カーボン年代以外の熱ルミネッセンスの年代が実施されたのは本県初であ



第２図　集石遺構



第３図　落し穴

る。

特徴

縄文時代早期の桑ノ丸式土器及び塞ノ神式土器の多様の文様が確認され，また早期の落し穴遺構の検出は本県初である。

資料の所在

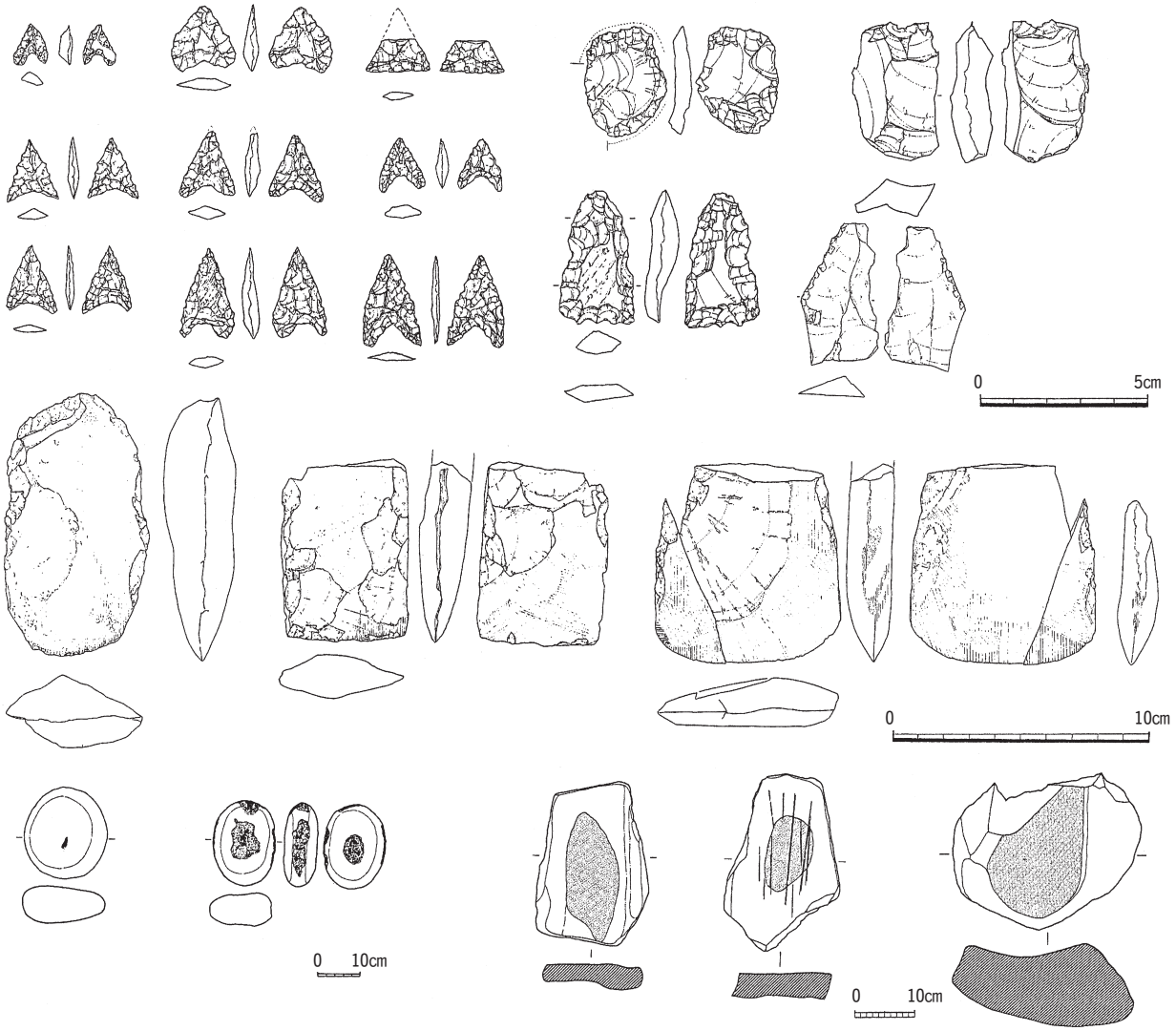
出土遺物は，枕崎市教育委員会に保管されている。

参考文献

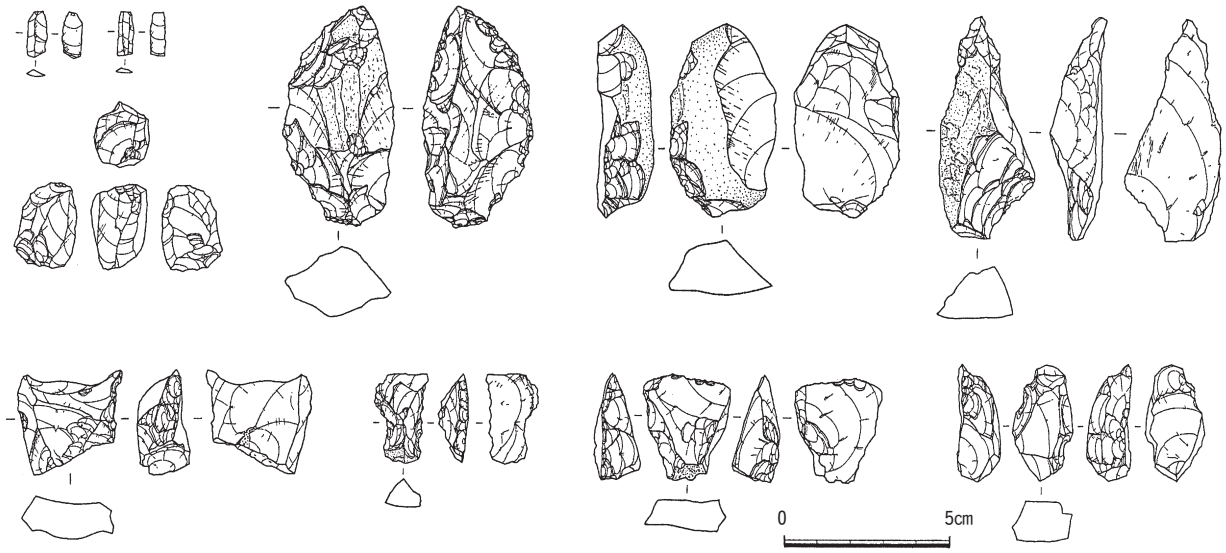
枕崎市教育委員会1987「奥木場遺跡」『枕崎市埋蔵文化財調査報告書』 3

（宮田栄二）

第４図　縄文時代早期土器



第５図　縄文時代早期の石器



第６図　旧石器時代の石器